

私と社会科学

—— 平和を求めて ——

高 屋 定 國

敗戦（一九四五年八月）

一九二七年（昭和二年）生まれの私にとっては、小学生時代に日支事変（一九三七年七月）が始り、中学二年の時には、大東亜戦争（一九四一年十二月）に突入し、卒業（旧制五年）の年の八月は敗戦であった。

小学生・中学生時代は戦争に次ぐ戦争の中で育ち、物心が付いてから、一九四五年の敗戦まで、総てが戦争に結びついていて。当時は、戦後や大正時代と異なり、言論統制が厳しく、国家の聖戦遂行目的以外の事は何も知る事は出来なかった。従って、その事に対する疑問を誰も持っていなかった。

この様な中で育った私が、十八才の誕生日を迎えたその月に敗戦を迎え、今までの國家・政府・社会の在り方が間違っていたと言われ、驚くと共に、今迄の指導者達（政治・言論・経済その他）に対する不信の念を持った。

この時（一九四五年八月十五日正午）の天皇の放送は、今でもはっきりと覚えている。この時の気持ちだが、その後の私の一生を左右して居り、恐らく死ぬ迄、持ち続けて行くであろう。

最初は、戦争責任を考えていたが、その様な感情的な思考ばかりでなく、なぜあの様な戦争が起こったのか？防止し得なかったのか？それ以外の道が無かったのか？と言う想いが起こった。

敗戦直後には、ユネスコ憲章の「戦争は人の心の中で生まれるものである」と言う様に、精神論が支配的であったが、私は、それに満足せず、戦争は、社会的現象であり、従って、その原因は社会に存すると考え、ここから私の社会科学への道が始まった。私の社会科学への道は「戦争と平和」に根ざしている。

最初は、当時流行していた経済学的アプローチによる日本帝國主義論に没入していた。しかし、これでは、戦前の日本資本主義論争から一步も前進して居らず、この前の戦争の原因を経済学的アプローチでは、人間が見えて来ない事に気付いた。

その後の昭和史論争でも同様な事が言われた。

経済学から政治学へ

この様にして、内外の戦争論を調べている時、「戦争は政治の延長である」と言う一言に出逢い、ここから、研究の重点を経済学から政治学に移して行った。

この様にして、明治以降の政治史を戦争を中心に見ていると、そこに出て来るのは、國家・政府の戦争遂行者側から見た側面ばかりである。それ以外の道が無かったのか？具体的に他の選択の道が無かったのか？

しかし、その様な状況の中でも、その戦争に反対する人達の声が無かったのかと探して見ると、明治・大正・昭和に於いても、今迄知られていなかった文学者や言論人、社会主義者達の反戦の動きを発見した。

その事から、私の政治学、日本政治史の研究は、日本社会運動史に重点を置く様になった。

それは、当時、私は、政治は権力をめぐる現象であるが、具体的には、権力者側と反権力者側との対立関係であると考えて居り、両者から見る必要があると考えていたからである。

國際政治学へ

その一方、戦争は國家間の紛争であるから、戦争を見る場合、兩國の政治情勢を見なければ理解できないと考え、研究の重点を日本政治史、日本社会運動史からコミンテルン（第三インターナショナル）を中心とする國際革命運動史・國際政治史に移して行った。

この様に、第二次世界大戦を日本を中心として調べて行くと、そこに浮び上がって来たのは、尾崎秀実であった。

尾崎は、朝日新聞の特派員として、上海事変の時、現地に滞在し、自分の目

で、事変の中から中國民衆の姿を見て、彼の強い人道主義が反戦主義に移行し、そこで、アグネス・スメドレーやリヒアルト・ゾルゲと知り合い彼等の強い影響を受け、その後の尾崎の思想と行動を決定づけた。

私が、尾崎を調べ出した当時は、未だ、彼をその様に理解する人達は少なく、支那問題の専門家であったが、近衛内閣の顧問であった点を強調して批判的であった。

しかし、私は、尾崎を調べば調べる程、尾崎・ゾルゲ・グループの戦局に対する影響が大きく、当然、研究の範囲が、当時の日本の対外政策の決定過程からソ連の対独政策にも大きく影響した事が解って来た。この点については、最近、旧ソ連の崩壊により、モスクワの政府、党の機密資料を見る事が出来、その事が確認されている。(未だ未確認の点も多々ある。殊に中國関係の資料は未発表である)。

ゾルゲ・グループの活動の中で特筆すべき事は、一九四一年七月二日の日本の御前会議による南進論の決定を、その日にモスクワに打電したことである。この情報を信じたスターリンは、極東の赤軍をヨーロッパの東部戦線に移動し、独軍の包囲から脱出し、東部戦線での赤軍の勝利の発端となった事である。

しかし、同じ様に、ゾルゲは、独軍の対ソ戦の日時迄、東京で知り、モスクワに打電したが、スターリンは、前回と反対に、それを信用せず、対抗処置を取らなかった為、独ソ戦の緒戦では敗北した。同じゾルゲからの情報について、日本については信用したが、ドイツについては信用しなかった事は、今後の私の研究の課題である。

私はゾルゲ・尾崎グループの研究から、彼等の活動が、諜報活動であり、軍事や、國際共產主義に関係して居り、現在でも十分に調査出来ていないが、國際政治学の一研究者として多くの事を教えられた。

その第一は、「一つの正しい情報は、万巻の書物に優る」こと。

第二は、國境、民族を越えて共通の政治課題について取組む事が出来ること。

第三は、情報の分析には、その民族、國民の歴史、殊に古代からの歴史を常に研究し、國民性を良く理解する必要があること。ゾルゲは常に日本古代史からの研究を積み上げて居た。

第四には、客觀的な情勢の分析には深くて広い立場からの理論が必要であり、

或る場合には余りにも原則的であると共に、常に、その結果についても、よりよい社会を求めての政策を考える事により、次の段階の分析力・理論が深まる事である。

歴史研究から非同盟主義・自主管理へ

この様に、日本資本主義を運動史の側面から見続けると同時に、その発展として国際社会運動史・国際政治史に重点を移した。それと同時に、歴史ばかりでなく、戦後の一時的な平和から、冷戦体制に移行するに従い、私の関心が、この体制〈ブロック体制〉からの脱皮の道に平和を考える様になった。

それと同時に、旧来の社会主義論に対し、現存社会主義國である旧ソ連の非民主主義＝スターリン主義への疑問・批判から両体制に批判的な非同盟主義に現実の平和の構想を見出し、ユーゴスラヴィアに約二ケ年間留学し、この國の外交路線である非同盟主義とソ連型の國家主義的社会主義に批判して創り出された自主管理の理論と實際を研究した。

帰國以来、しばらくは、ユーゴスラヴィアの非同盟主義と自主管理を日本に紹介したが、国際政治を研究するばかりでなく、前述した様に敗戦の時に焼き付いた「戦争と平和」が再び私の心を動かした。

日中・日朝の國交正常化へ

それは、日本の平和と安全保障は、隣國との平和、友好と相互理解による共生である。

当時は未だ、日本は、中國と國交を回復していない時であり、先づ第一の課題は、中國との國交の正常化であると考えた。丁度、その時、或る政党からの要請もあり、その道に盡力した。

この過程で、書物や活字では得られない具体的な経緯を、中國の指導者達の会談や会話から得る事が出来、時には、或る条約の締結について依頼されて交渉した事もあり、その中で、国際政治学や政治学の勉強に非常に大きなものを得る事が出来た。

日中の國交が正常化した以上、今後は、両政府間の外交ルートで行けば良いと思い、その後は、表面から引き下がった。

しかし、日本としては、未だ残っていることが在る。それは、隣國の朝鮮民主主義人民共和國（以下北朝鮮）との國交正常化である。この事に気付き、ここ十年余りは、それに力を注いで来た。

私の北朝鮮との関係は、隣國との國交の正常化による東アジアの安全保障を求めている関係である。國交の正常化は國際関係では全く普通の事であり、國交が無い事がむしろ異常な事である。國交を正常化し、友好関係を持つ事は、相手國の考え方や制度を正しいとしてわが國に導入することでは無い。相互に相手の國情を理解し合う事である。個人を例にすれば、隣の家と仲良く付き合う事が、直ちに隣の家の家風を受け入れる事ではないのと同様である。

ここから、一日でも早く、この國との國交正常化による東アジアの安全保障体制を確立することである。その前提として両國民の相互理解である。

私の出来ることは、両國間の学術・文化・宗教の分野に於ける交流を求める仕事である。北朝鮮の責任者は社会学者協會の委員長であり、労働党の理論と國際問題の担当書記で、國會議長の黄長燁（ファン・ジャン・ヨフ）氏であった。彼は、哲学者であり、東西の思想にも理解の深い学者であり、ここ十数年間の毎年の交流は彼との関係で順調に進んで居た。しかし、一九九七年の一月に私達でお招きした帰路、北京で南側に脱出され、今、新しい段階でのこの國との交流の在り方を考えて居る処である。どちらにしても、この朝鮮問題は、私の國際政治学の研究対象であるばかりでなく、東アジアの安全保障体制の創造に結びついているものである。

結び

この様にして、私の社会科学＝政治学＝國際政治学の研究は、私の考える当面の政治的課題に従って、問題を設定し、それが、私なりに解決すると次の課題に移っていった。

これも、最初に述べた様に、「敗戦」の時に考えた「戦争と平和」から社会科学への道を進んだ結果である。従って、社会的な現象の分析だけで満足出来ず、どの様な場合でも、人間は常に選択の立場に立って居る者であると考え、如何にすれば、より好い選択を選ぶ事が出来るかを考えるべきであると考えて

きた。又、人間はその様な選択の自由を持って居り、従って、その結果に対する責任を持って毎日生きている者であると思う。

その様な私の考え方が、結果として、社会科学の中でも政治学の道を選ばせたのである。
(一九九八年十一月一日)

主要著・訳書（共著・共訳を含む）

「現代史の諸問題」 一九六九年 京都精華学園

「現代世界を見る眼」 一九八六年 ミネルヴァ書房

「グローバル時代の政治」 一九九七年 ミネルヴァ書房

「日本におけるキリスト教と社会問題」 一九六三年 みすず書房

「共産主義の“変容”と国際政治」 一九七九年 外務省調査部

「ゾルゲ事件」 一九七九年 至文堂

M. ドルーロヴィツ著「試練に立つ自主管理」 一九八〇年 岩波書店

E. カルデリ著「民族と国際関係の理論」 一九八六年 ミネルヴァ書房

ILO「ユーゴスラビアの企業における労働者自主管理制度」 一九七四年 至誠堂

コミンテルン編「極東勤労者大会—日本共産党成立の原点」 一九七〇年 合同出版

M. ショー著「グローバル社会と国際政治」 一九九七年 ミネルヴァ書房

(たかやさだくに 佛教大学社会学部社会学科教授)